

# Mary Bartonとヴィクトリア朝メロドラマ

## D.ブーシコーによる翻案劇('66)などを中心に

[ 承前 ]

井 出 弘 之

『ギヤスケル論集』第15号の拙論末尾に「紙幅の制約上、やむを得ず以下は次号に」と私は記した。前号ではまず1)この‘センセーション・ドラマ’の屈指の名手がなぜ'66年に?かを問うた。2)ついで彼の翻案劇『長期ストライキ』以前の工場メロドラマ史を辿り、*Mary Barton*劇化の機運はすでに熟していたことに注目。3)原作のどんな筆致に彼が目を輝かせたか...時代の最先端をゆくライシアーム座にふさわしく彼が凝らした演劇的戦略により何がカットされ、何が獲得できたかに焦点を絞りつつ、論は今や酣である。

[ 劇作家の卓抜な言語感性は.....モダンな言語手法を編み出した。着想の原点は小説原文であれ、実にオリジナル ] 例えばI-iにはノア(=John Barton):「労働者の鉄の心は鋼となりて...」「労働者に権利を」、I-iiでは登場早々のジェイン(=Mary)に「うちを見張るどんな権利が...」ジェム「君を愛する権利はあるさ」をブーシコーは加筆した。ジェム「君のハートは虚栄で一杯」あたりは原作のママだけれど。果たして客席が、さすが親娘、血は争えぬものと思ったかどうか(笑)。何しろ工場主までが.....そしてジェムの求婚の辞では両フレーズが揃い踏み「金はないが愛するハートと a strong right arm さえあれば君を守れる」(語呂合わせ)。企まざる意図を汲んでしまうのは必定、と思うのは私だけではない。

‘heart’のミステリーこそ19世紀大衆文芸最大のトポス、と先に述べたが、いかにも‘心’こそ近代的思考パラダイムに容易に組込まれ得ない最後のものがあったからだ。だからこそ、それは、業師ブーシコーにとってウィットシズム湧き出る泉。原作では、労使の青年を両天秤にかける少女の胸中は「まるで二人の人が議論しているみたい」(11章)と地の文で表現されていた。が、劇作家の

手にかかれば「a heart wi'another man in it」を差上げる訳にはいかないわ」(I-iii)、「...を頂く訳にはいかないね」(II-i)という台詞に生れ変わる。そんなサウンド効果抜群の修辭的言説が、綾取りゲームか‘ring-play’さながらリレーされてゆくのだ。幕切れでヒロインが「ハートをright side upしてジェムに示す」時まで。

ところでこの作品に見え隠れする最も切実なライトモチーフは、父親のそれに劣らぬ、ジェムのいわば心の闇だ。惨事直前に若き工場長レッドリーから「親父さんはチクらなかつた、君のためにね(‘for your sake’)」と囁かれて娘は頷く、「匿ったのも私、父と労働者を裏切ったのは私だわ」(II-iii)。やがてジェムも、癡狂したノアを見て、下手人は父親だと覺り、口をついて出てくるのは同じ慣用句‘for your sake’(III-ii)！さらりと「親のハートを娘の‘shame’が壊したのさ」と言つてのけるのは下層労働者仲間 Jack だ。序でながら青天の霹靂、戯曲表題の‘長期スト’が終息した訳を「何千人も職場へ帰つてくぜ、誰も悶着にや無関係って面してえやな」と諷するのも、彼ら。それはあながち興ざめな冗句ではない。彼ら労働者たちは‘現代っ子的’諧謔の名手なのだ。閑話休題。思い出されるのは原作 32 章、法廷で錯乱を堪える Mary の面貌が「Guido の絵 チェンチ (暴虐な父親を殺した娘) そっくり」と記されていた卓抜な下りである。小説はすぐれてギャスケル的な語り手に「あくまでこれは噂」とそっと断わり書きさせていた。しかし語り手を介さない劇空間では、これとても登場人物たちの飛び交う台詞の筋、そのポリフォニックな響きに賭ける他ない。

関連してもう一つ。心の意識下の世界を強く印象づけるために、ブーシコーは‘狂人’ノアに、日常的文脈から外れた奇天烈な断片的台詞を口走らせる、という妙手をつかつた。ノアが‘Him I spared for your sake’とか‘It's a bargain you offer ...’とわめくとき(III-ii)、それが邸裏通りで工場主と交わした会話(II-iii)の断片で、父は立ち聞きしていたのだと、ジェムにだけは判り、父ノアの心の傷痕の深さを察するほどに、ジェムの無実の罪を晴らそうと彼女もまた‘for your sake’...といった作劇法。『コルシカの兄弟』(’52年)で大ブレイクした劇作家ならではの仕掛けだが、ヴィクトリア朝の‘心’の知もここまで進んでいたことの証しでもある。

ここで原作者ともブーシコーとも接点をもった他の劇作家作品、との関わりにも触れておく。まず『長期スト』の警官の名 Crankshaw (小説では B72) は Tom Taylor 『仮釈放の男』(63年)の辣腕刑事‘ Hawkshaw ’からの借用。大都会の片隅の孤独な‘ランカシアから来た若者’を巡る、この超ロングラン劇は、マンチェスターでも毎年公演。ギヤスケルも彼とは旧知の仲でその才能を高くなっていった。(ただ Crankshaw は生真面目者で言葉の意味は一つと思うたち。ジェインを「蓮っぱな浮気娘」、また「ジェムが奴[実は、自身]の脳天ぶっ飛ばす恐れあり」と聴けば‘工場主を’だと早とちり)

いま一つは‘too late’との関わりで 原作では行間に潜んでいたこのメロドラマ的モチーフを、翻案劇は台詞化。小娘の‘too late’と叫び続ける声に馬耳東風であった弁護士が、南北戦争関連の新聞記事“Latest From America”を見て「too late ってのは意味があったのか！」(笑)と我に返る下り(III-iii)は圧巻だ。幕切れで水夫が‘Am I too late?’と叫びつつ駆込むのは、その画竜点睛。ここには、我らが劇作家自身がそのスクリプト・チェックを務めた C. Reade, *It's Never Too Late To Mend* (’65年初演)のエコーがある。Reade の文才はギヤスケルの視野にも入っていた(「次作が楽しみ」etc.)。ブーシコーは‘その向こうをはった’訳だ。

最後に 『長期スト』の登場人物とっ換えひっ換え、場面の急転換についてだが、これまたギヤスケル作品の魅力的な語り口の延長上にあることを指摘しておこう。I-i 労使入れ替り、につぐ I-ii ジェム レッドリー またジェム、とりわけ I-iii などは 2 階建て舞台を活用した小気味いい急テンポ、まるで‘猫と鼠’の追っかけっこ。これが Moncrieff, Jerrold, Mathews, Morton ら笑劇 (farce) 作家たちの輝かしい伝統を踏まえた趣向であることは、明らかだ。が、ジェインが邸へ、その後を追うノア (II- ii ~ iii) という移動リピート構造と、原作 17 章のそれ(銃を抱えパートンが消え、その直後を‘語り手の目’だけが追う)との類似に感づく時 そう、3 章では「違う、安らかだった...が死んでいた」とフェイントをかける語り口、6 章には「貧民たちの心の底には思わぬ美点が...しかしハートは罪と憎悪に染まっていた」など、枚挙の暇はない。語り手が John から Job へ (9 章) ふたたび John へ (10 章冒頭) といった思いがけない視点人物転換についても、また然り。このギヤスケルならではの狡猾、おっと絶妙な

‘subtly deceptive’な語り手の声（Sabiston）をブーシコーが面白がらなかった筈はない。

この戯曲は＜工場メロドラマ＞への挽歌であり、また、前年逝ったギヤスケルへの挽歌でもあったとすることができる。

本論は2004年7月3日、日本大学で開催された日本ギヤスケル協会例会での講演に、大幅に加筆したものである。ご質問、発言に教わるが多かった。

#### 主な引用・参考文献

John Walker, *The Factory Lad; A Domestic Drama in 2 Acts* (1832), in M. Booth (ed.), *English Plays of the 19th Century I*, OUP, '69. / J. C. Smith (ed.), *Victorian Melodramas*, Dent, 1976.

G. F. Taylor, *The Factory Strike; A Domestic Drama in 3 Acts* (1836), Dick's Standard Plays.

Dion Boucicault, *The Long Strike; A Drama in 4 Acts* (1866), Samuel French.

\*

Richard Altick, 'Dion Boucicault Stages *Mary Barton*', *NCF*, 1959.

Sally Vernon, 'Trouble Up at t'Mill: The Rise & Decline of the Factory Play in the 1830s & '40s', *Victorian Studies*, 1977. 拙論の2（後半）はこのリサーチ・ワークに多くを負っている。

Raymond Williams, 'Melodramas and the Working Class', in Mackay (ed.), *Dramatic Dickens*, St. Martins, 1989.

林芳子「劇化された『メアリー・バートン』検証：原作との比較検討」、『ギヤスケル論集』第9号、1999。日本における同じテーマの掛けがえない唯一の先行論文。拙論をお読み頂く機会もなく林さんは急逝された。無念である。

\*

E. Sabiston, 'Anglo-American Connections: Gaskell, Stowe & the "Iron of slavery"', in Plasa & Ring (ed.), *The Discourse of Slavery*, Routledge, 1994.

Kathleen Tillotson, 'Mary Barton', *Novels of 1840s*, OUP, 1953.

Michael R. Booth, *English Melodrama*, Herbert Jenkins, 1965 / *Theatre in Victorian Age*, Cambridge UP., 1991.

- Maurice Disher, *Blood & Thunder: Mid-Victorian Melodrama & Its Origins*, Fred Mullers, 1947 / *Melodramas: Plots that Thrilled*, Rockliff, 1954.
- M. Booth et al (ed.), *The Revels History of Drama in English VI*, Methuen, 1975.
- G. B. Cross, *Next Week—East Lynne...1820-74*, Associate Pr., 1977.
- Richard W. Schoch(ed.), *Victorian Theatrical Burlesques*, Ashgate, 2003. 'Theatre and mid-Victorian Society, 1851-70', in J. Donahue (ed.), *The Cambridge History of British Theatre*, Cambridge UP, 2004.
- Michael Diamond, *Victorian Sensation*, Anthem Pr., 2003.
- Jenny Taylor & S. Shuttleworth (eds.), *Embodied Selves: An Anthology of Psychological Texts 1830-1890*, OUP, 1998.

